

特集 頑張る女性OB

建築学科では、かつては男性が圧倒的多数を占め、1学年に女性は数人という時代が続いていました。しかし、状況は変わり、女性の比率も高くなっています。それに連れて卒業生の中にも、活躍が目覚ましい女性OBが増えています。今回は、5人の女性OBに最近の活動内容を寄せてもらいました。

「様々な視点で物事が決まることを実感」 寺林 成子(部1期) エス・オウ設計事務所

1998年秋に設計を始めた建物が今年の春に完成しました。5階建ての建物で1階は店舗(お好み焼屋)、2階から5階はワンル・ムの賃貸マンションです。敷地は35坪で形は三角形をしています。一边は水路、一边は田園都市線の高架線に面し、残りの面は隣のマンションに接しています。初めて敷地を見た時、水路と敷地の間に4メートルの道路があるのを見て「何か挑



築理会ではホームページを開設しています

URL=<http://www.chikurikai.org>

会報委員会では、築理会会員がつくった個人のホームページを募集いたします。腕に自信のある方はふるってご応募ください。追って紙面に紹介する予定です。

URLと作成コンセプトを添えて会報委員長・森まで (smori@nikkeibp.co.jp)。

戦できそう”と思っていたのを覚えています。ところが設計を進めてみると水路や線路に面しているのは意外と大変であること、そのうえ線路の上に高压送電線が走っていることが新たに分かったのです。



実は、今までいろいろな用途の建物を設計してきましたが飲食店は今回が初めてでした。それだけでなく、店のロゴ・看板・メニュー・家具の個人輸入といったものまですべてを見ることが出来る機会に恵まれたのです。そこでいろいろな立場や視点で物事が決まっていくこと、また判断基準も違うことなどを実感しました。私も設計者という物を作る側の人間なので、いろいろな立場にたって考えますが、実際にかかわってみるとまた違うものがありました。私にとって違う建物を設計することは毎回新しい挑戦であり、出会いだと思っています。こんな時代だから、こだわりながら作る姿勢を崩さずにいたいと思いますし、一方驚沢だとも思っています。

何とか設計を終え、工事にかかりましたが、前面道路の狭いところで真夏に打ち放しコンクリートの工事をするには思った以上に苦勞がありました。

しかし、今はともかく竣工し、店舗も賃貸マンションも順調にスタートしたので一安心しているところです。

「現代的な要求との折り合いに苦心」

横村 宜江(部19期)

波多野純建築設計室

出島オランダ商館復原建物設計監理担当

長崎の出島とって思い浮かぶのは、扇形の島や閉じこめられたオランダ人、というイメージでしょうか。現在は明治期以来の埋め立てですっかり内陸化し、当時の建物はおろか島の形

もよくわからないという状況です。この出島を、西洋に開かれていた唯一の窓として光り輝いていた時代の姿に復原する、そんな仕事に携わっています。

島の広さは約1.5ha、19世紀初頭には約50棟の建物がありました。建物はオランダ人の住まいも含めて、長崎の大工が建てた漆喰壁に瓦葺きの和風建築。オランダ人は畳敷きの部屋で靴を履き、壁紙を貼り(実は日本の唐紙)、ベッドや机といった洋風の家具を持ち込み、窓にガラスをはめ、和とも洋ともつかない不思議な部屋で暮らしていたのです。

戦後まもなく始まった復原計画は、1996年によく本格化し5棟の建物の基本設計に着手。日蘭修好400年の記念行事に合わせてこの3月に工事を終えました。5棟の内2棟は内部の家具調度類まで復原し、当時のオランダ人の暮らしぶりを再現しています。

国指定史跡内での工事には文化庁の厳しい審査があり、復原の内容そのものが難しいだけでなく、構造強度を確保し、バリアフリーにも配慮、空調も欲しいなどという現代的な要求を江戸時代の建物にどうやって折り合いをつけるかという難問にはかなり悩まされました。しかし、国産の松材を手斧仕上げで梁に架け、地元で選んだ竹と土で壁を塗り、漆喰の材料は貝灰とぎんなん草、という今の時代にはとても贅沢な現場でもありました。

江戸時代は当たり前だった木と土と紙の建築は、時間とともに味わい深くなり最後は土に戻る、これは現在見てもかなり魅力的です。もともと古い時代の良いところを今の建築に取り入れたいということで始めた歴史の勉強です。復原工事での経験を現代の建築に生かしたい、こんな夢を持ちつつ長崎で工事報告書をまとめる作業をしております。



(オランダ船船長の部屋)

「始動1年、ただ今試行錯誤中」

上條 美枝 (部20期)

上條美枝建築研究室

昨年7月に事務所を開設し、どうにか1年が過ぎようとしている。仕事のあても無く独立したので、かなり不安な出発ではあったが、最近やっと小さなオフィスビルの現場が進行している。ビルというと聞こえはいいが、規模は住宅より小さい最小限ビル、次の仕事も不確定で先行きの不安は相変わらず続いているのだが…。さて、独立して変わったことは何か。収入減はさておいて、やはり初期段階の整理検討にかけられる時間の減少であるうか。人を雇う程の仕事もなく一人ですべてを行うという現状では、一人何役もこなさなくてはならない。(そんなの当たり前という方には申し訳ないが、建築を考えるという事だけに集中していられたこれまでの環境にあらためて感謝。)5人で5案検討できる時間でも、一人では1案。しかも一人だと固執してしまう部分も多くなりがち。「初期段階で考え方を固定せず、しっかり条件整理した上であらゆる可能性を探り最良の案にたどり着きたい。」という設計スタイルを保つには、もう時間でねばるしかないのが現状である。一方、人(施主)とのかかわり方も課題の一つで、これまた時間をかけなくてはならない。個人の確信自信の不確かさからか時間切れか、何を妥協して何を保つべきなのか相手にきちんと説明説得できず、自己閉息気味となってしまう。そんな訳で、独立してからはひとつひとつ勉強し直しといった日々である。(これはまた楽しい日々?)

さて、こうして一人で行えることの限界にぶつかると、個人でのネットワークの重要性を考えさせられる。性能評価や環境問題、シックハウス、ライフサイクルコストetc.検討すべき事柄が膨大になり、個人での勉強にも限界がありそうである。そこで個人という単位を生かし、各分野での専門家が対等に力を発揮できるような体制をつくりたい。かつて学生のころに思い描いた、プロジェクトごとに各分野の専門家が集まってチームを組んで設計するという夢も、今やインターネットが発達し極めて身近なものとなっている。共に理科大で建築を学び、様々な分野で活躍している人



達、ぜひ企業を離れた個人ネットワークをつくってみませんか？

(mie-kami@wb3.so-net.ne.jp)

「骨材を連日ふるい続けた日々」

室屋(斉藤)しおり(部15期)

(財)建材試験センター

入社して7年目。育児休暇で1年間休職し、現在、(財)建材試験センター中央研究所の試験管理室で試験に関する問い合わせの対応を行っています。

私が入社したのは平成6年。最初に配属されたのは無機材料試験課でした。ここでの初めての仕事はアルカリ骨材反応性試験でした。アルカリ骨材反応といえは、建築材料の授業でひび割れの原因の一つとして習ったくらいで、実際、どのようにひび割れが入るのかまでは詳しく知りませんでしたが、この職場で亀甲状のひび割れやポップアウトをこの目で確認することができました。

この時期、レンガやタイルの試験も行っていました。当時はリサイクル製品が流行していて、汚泥の焼却灰を使用したレンガの試験が多かったことを記憶しています。

入社して2年後にコンクリート班に異動になりました。それまでは単独での仕事が多かったのですが、コンクリート班ではグループ作業が多くなりました。コンクリート試験は材料準備、練り混ぜ、試験体製作、そして硬化コンクリートの各試験という手順で進み、一番たいへんなのは、真夏と真冬の骨材準備です。真夏は炎天下の陽射しを受けて真っ黒に日焼けし、冬場は骨材を洗う水の冷たさが身にしみました。

この頃、JISとISOの整合化(現在も進行中)という動きが始まり、建材試験センターでもコンクリートと骨材試験について、両規格の比較を行いました。

私はふるい分け試験を担当。JISのふるい目の寸法はひと通りなのに対し、ISOでは3通りあり、ふるいの種類もJISが一つなのに対してISOは3種類あります。JISとISOの両方の規格のふるいで、それぞれ3回ずつ何種類もの骨材を毎日のようにふるい続けたことは、一生忘れられないほど、大変な経験でした。

その後、セメントと骨材の試験を担当し、現在に至っています。新しい部署に配属されてまだ3カ月なので、勉強しなくてはならないことが山ほどあり、育児と仕事の両立のたいへんさを感じています。

「私の道」

松永 典子(部16期)

I D造形センター

私は今、女優への道を歩んでいます。でも建築をやめた訳ではありません。私はNHKの水曜ドラマ「新・花へんろ」で初めてドラマ出演した時に、1つの作品を多くの人々の手によって作り上げることの醍醐味をととても強く感じました。それは建築ととてもよく似ているのです。監督がいて、設計図的役割の脚本があり、大道具、小道具、カメラ、照明、衣装、メイク等々の役割の人々がいる現場があります。そこでは1つ1つの空間があり、コミュニケーションが生まれ、生活が生まれる。私はこの世界にととても魅かれ、もっと追求していきたいと思ったのでした。

その後私は、NHKの朝の連続テレビ小説「やんちゃくれ」でヒロインの母役の藤真利子さんの秘書でガーデニングデザイナーという役どころで、レギュラー出演しました。朝の連ドラ収録期間は6ヵ月。沢山の事を学びました。初めて空気の流れというものを肌で感じる事ができました。それが非日常的空間が日常的空間になる瞬間なのです。

今年朝日ニュースターでニュース番組のコメンテーターという初めての経験もできました。今はキッコマンのCMがオンエアされています。今度の課題は来年放送のNHK開局記念ドラマ「聖徳太子」での身のこなしです。私は今、新しい出会いと発見のなかで刺激的な楽しい毎日を送っています。

そういう中で、NHKプロデューサーの2世帯住宅の設計のお仕事をいただきまして、ただいま考案中です。感性を磨くため先月はパリーフィレンチェ・ローマと写真を撮りにまわってきました。

実はもう一つの職業、グラフィックデザイナーとしても光栄にも築理会の野々村俊夫会長の本「呑流建築雑話」の編集デザインをやらせていただきまして、今月発行します。とても素晴らしい本なのでぜひ読んでいただきたいと思います。B型で好奇心旺盛な私は、これからも色々なことにチャレンジします！



平成12年総会・懇親会開催される

去る3月16日、飯田橋の「トリノ」において、平成12年度の築理会総会と懇親会を開催しました。当日の出席者は以下の通りでした。

来賓：井口先生、平野先生、大月先生
理工学部建築学科OB会：
立見会長、菊池副会長

OB、学生：28名

井口先生と平野先生より、退官に当たりご挨拶を頂きました。建築学科の創設時から今日までの思い出に残るお話を全員で懐かしく拝聴しました。その後、野々村会長より築理会の会計報告と今年度の活動方針の説明があり、全員一致で可決いたしました。

幹事一同今年度も頑張りますので、会員の皆様のご支援とご参加よろしくお願ひいたします。
(事業委員長=入野 公男, 部15期)

築理会ホームページ(HP)更新のお知らせ

このほど築理会HPを維持・更新する情報委員会を部16期OBの塚田とNTTファシリティーズ理科大OBグループで引継ぎました。この会報がお手元に届く頃には、今までのHPをもとに、より親しみが持てるものに更新予定ですのでご覧下さい。運営は数万円のサーバー利用料のみを築理会会費で賄い、維持更新はボランティアとします。アクセスの多いHPになるよう、会員の皆さんからも提案やコンテンツをお寄せ下さい。



- 情報委員会マーク -

http://www.chikurikai.org

(情報委員長=塚田 敏彦, 部16期)



- 築理会HPサイトマップ -

理工学部「野田建築会」懇親会に出席して

去る5月20日土曜日、築理会の野々村俊夫会長と共に、理工学部建築学科のOB会組織「野田建築会」の懇親会に出席させて頂いた。今年度の築理会活動計画のひとつに、「理工学部との交流」がテーマに挙げられており、3月16日の築理会懇親会に「野田建築会」の立見栄司会長等をお招きしたそのお返しにと、理工学部OB会よりご招待頂いたものである。当日は井口先生、平野先生の退任に伴う特別講演会と重なったが、せっかくのご厚意、久しぶりに野田キャンパスを訪れた。あいにくの小雨模様であったが、新緑の鮮やかさと木々の香りがキャンパス全体を包み込んでいて、神楽坂キャンパスとはまったく趣を異にしていた。校舎も徐々に充実しているとのこと、羨ましかぎりである。懇親会会場は正門近くの第3食堂にある職員専用フロアで開催された。50名以上の理工学部OBが出席され、和気あいの盛会であった。席上、挨拶に立たれた野々村会長は、理工学部との交流をより充実させるため、懇親会を2年に1度くらいは合同で開催しましょうと提案された。また、野田建築会の立見会長からは、組織も出来たばかりなので築理会のノウハウを色々教えて頂きたい、とご挨拶いただいた。築理会は諸先輩方のたゆまぬ努力によって今日の組織に育ってきた。野田建築会もまた立見会長を中心に幹事諸兄の協力の下、これからも末永く活動を続けられ、充実した組織に育つよう、心より願う次第である。何事も継続は力なり、である。両会の交流を深める大変有意義な懇親会に参加させて頂き、この紙面を借りて「野田建築会」の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(企画総務委員長=坂下 誠, 部2期)



(挨拶に立つ野々村築理会会長)

井口先生・平野先生

特別講演会・懇親会開かれる

去る5月20日(土)に、東京理科大学1号館17階記念講堂において井口先生・平野先生 特別講演会・懇親会開かれました。両先生はこの3月に理科大学を定年退職されています。井口先生は「時代と場と個人と---工学部建築学科37年間(1963年度30歳~1999年度66歳)の回顧---」、また、平野先生は「私の終局耐力研究 その原点」という題目で講演されました。講演会には200名以上の来場者がありました。引き続き、懇親会が開かれました。

懇親会では真鍋先生の開会の辞に始まり、土谷耕介氏(元清水建設)の乾杯の音頭、安岡先生のスピーチ、又、それぞれの研究室を代表して石橋利彦氏(石橋・徳川建築設計事務所)、穂積秀雄氏(新潟工科大学)が話されました。卒業生の出席者は166名に及び、これは建築学科卒業生が一同に会したのでは最大の数です。懇親会は両先生を中心に、また出席されている先生を囲んで歓談が続きました。そして松崎先生、直井先生から両先生への記念品贈呈、最後に真鍋先生の閉会でなごやかな一時も終了しました。なお、井口・平野両先生は引き続き非常勤嘱託教授として理科大学には来られています。

(事務局長 = 大岩 昭之, 部3期)

根幹としての教育

石橋 利彦 (部5期)

建築を構築するために必要な知識は膨大なヴォリュームであり、習得には相当のエネルギーを費やさなくてはならないが、それを限られた時間内で学生に教えるとなると、さらに強力なエネルギーが必要である。そうしたテンションの高い状態を37年間も維持された井口先生の回顧には、上辺だけでは語れない教育の根幹を感じた。

本当に建築学科の学生のためになる教育とは何かと考えると、最先端の技術や流行を教えるだけではないのは言うまでもないが、とかく派手な傾向に目が向いてしまうのは学生だけのことではない。そうした環境にありながら、井口先生は建築学科の創生期から、教育の根幹は工学部の理学化だということを教育方針として打ち立てていたのである。現在では一般的に工学部の理学化ということが取り上げられているが、1960年代では希な考えであったであろう。先生はその考え方を構法に置き換えて、現実的な教育をしたのである。

構法計画は、当時は最先端の分野であると思われていたが、現在では意匠計画、構造計画、設備計画より前の段階として位置づけられる基本的なシステムである。根幹となるシステムが明快ならば、意匠も構造も設備も明快になるのである。したがって建築の現場生産であろうと工場生産であろうと、問題となるのはシステム、つまり構法計画である。シス



テムの善し悪しが、その建築のクオリティーを左右すると教育したのだ。その点が、根幹をないがしろにして流行を追いかけて、実社会において使い物にならない学生を育てる教育と一線を画すところである。

一定の方向性を学生に植え付ける教育とは異なり、理学的な教育は建築を構築するシステムの基本教育である。その先は多方面に広がり、結果として個性を発揮する礎となったのである。その成果は、研究室から輩出された多様な人材によって評価されるであろう。

恩師半生を振り返られてさわやか

穂積 秀雄 (部5期)

恩師・平野道勝先生の特別講演をひとしおの感慨とともに楽しくお聞きしました。

お話は、塑性力学の黎明期に出会いその発展に貢献できたことへの感動を中心に、ご自身の学生時代を含めて、東京理科大学での研究活動と社会的活動を40年にわたり振り返ったものでした。

お人柄でしょうか。お話をいたるところで、とりわけ研究活動をおまとめになられたところでは、実験施設を提供してくださった関係者や、研究に共に励んだ大学院生、卒業研究生をはじめとする多くの方々に、丁寧に謝意を述べられていました。大学運営や社会的活動を含めて、大きなご業績が、豊かな才能はもちろん、この人となりあってのことと、あらためて感じ入った幸いです。

先生は、新しい卒研究生を受け入れる度に、塑性力学のゼミを行なってこられました。塑性力学がやがて実務として主要な役割を担うであろうと、当初から認識なされていたのはもちろんのことと思われるが、特別講演をお聞きして、このゼミでは、学問の黎明期のもつ雰囲気と、その発展を支えた喜びを、今では学問の喜びを伝える授業はすっかり珍しくなりましたが、われわれにそれを伝えておられたのだなと再確認をしました。

今回の特別講演では、その昔に二見秀雄先生から、「両端固定梁があって、荷重がだんだん大きく

なって、梁のどこかが弾性の範囲にとどまりきれなくなったら、その後どうなるかね。そこでおしまいかね」と持ちかけられたこと、塑性力学の世界に踏み込んだその瞬間のことを、当時の感動をそのままに話題になされました。ところが、そのなされ方が、OHP上で、塑性崩壊に到る過程を律儀に解析しながらというわけで、何とかしてそのときの感動をそのまま伝えたいというお気持ちが素直にあらわれていました。こんなところにも、わたくしには平野先生のお人柄を拝見したように感じられ、たいそう嬉しい思いを致しました。そういえば、永いこと、先生のもとでご指導を頂いてまいりましたが、講義形式での構造力学をお聞きしたのは初めてかもしれません。

ご講演では、一つ一つ題目をあげながら、研究成果をおまとめになられていましたが、研究領域の広さにあらためて感心させられました。解析、実験を問わず、そのほとんどが構造物もしくは部材の終局挙動の把握を目的としていて、この一貫した姿勢に、やはり、塑性力学との出会いの影響の大きさを知らされたように思います。

お話には出てきませんでしたが、先生のご研究の姿勢は極めて厳格で、例えば実験では、目的はあくまでも耐力の伝達機構や破壊機構などの根本の究明にありました。実験変数と耐力の関係をグラフ化することなどが手段としてしばしば用いられていましたが、安直にそのこと自体を目的とすることは決してありませんでした。先生は、試験体を工夫して、実験変数相互間の複合作用を巧みに分離し、あるいは、実用範囲を越える価の実験変数を採用して、現象の本質をより明瞭にすることをお好みになられていました。

最後になりましたが、ご講演中の先生は実にさわやかで、一人の真摯な学究がその半生を振り返るとはこういうことが、と深い感銘を覚えました。ご講演をお聞きした多くの卒業生が、先生のお若いのに驚かれたことと思います。ますますお若く、ますますご活躍なされますよう祈念し、あわせて卒業生への変わらぬご指導をお願いします。

有意義で懐かしいご講演をありがとうございました。



真鍋恒博先生 日本建築学会賞(論文)受賞

本学科の真鍋恒博教授が、「建築構法計画学における構法の体系化に関する一連の研究」によって、2000年度日本建築学会賞(論文)を受賞されました。去る4月19日、日本建築学会理事会において2000年度日本建築学会賞の受賞者が決定され、5月30日、建築会館ホールにて授賞式が行われました(写真)。

この一連の研究で取り扱った建築構法計画学の理論とは、端的に言えば、

「手法の体系化」です。すなわち、設計者に対して要求される様々な分野の知識を横断的・総合的に理解し、様々な設計上の手法を体系的に把握するという視点、つまり、「あり得る構法の種類を網羅体系化すること」です。

この研究成果は、真鍋先生が東京理科大学に着任してからの建築構法計画学研究の集大成と言えます。これは、真鍋先生と真鍋研究室のメンバーによるものであると同時に、東京理科大学の構法計画グループとの共同作業の成果でもあります。

特に膨大な資料収集、分析作業を行った卒業生、時に新たな視点を提案し論文をまとめ上げてきた大学院生らの努力に支えられていることは言うまでもありません。長年にわたる真鍋研究室の研究が評価されたことは卒業生としても実に感慨深いものがあります。



毎年開かれている真鍋研究室のOB会も、今年には受賞祝賀会として開催されました。これまで以上に多くの卒業生の方々がお祝いに駆け付けてくださり、総勢100名に迫る盛大な会となりました(写真)。

受賞をお祝いすると同時に、真鍋先生の今後の益々のご発展をお祈りし、ご報告に代えさせていただきます。

(真鍋研助手 = 名取 発, 部28期)

日本建築学会賞授賞式
岡田日本建築学会長から賞状を授与される。
建築会館ホールにて
2000.5.30

連載 研究室紹介(第3回)

研究室紹介も第3回目となりました。日常大学から疎遠になりがちなOBの方々に、理科大の今を知ってもらうため、現在どんな研究をしているのか等、研究室内から記事を寄せて頂くコーナーです。

今回は真鍋研です。どうぞお楽しみ下さい。

真鍋研究室紹介

1. 真鍋研究室の発足

真鍋研究室は、昭和48(1973)年4月に発足し、今年度で28期目、卒業生・在学生合わせて真鍋研メンバーは約350名に及びます。

研究室は、当初は7号館8階の一角にありましたが、事務室・図書室が9号館に移動した跡の7号館9階に納まって現在に至っています。

2. 助手・院生の充実

研究室の助手・補手は、現在の名取助手(28)で8代目となります。真鍋研出身者はその内3名で、歴任の助手・補手の出身校は、明治・早稲田・理科大(理工学部)・武蔵野美術大と多彩です。

研究室発足3年目に最初の大学院進学者があり、その後次第に増え、やがて大学院生の存在を前提とした研究室体制が定着しました。近年では、部卒研生、共立女子大生、院生、助手を含んで毎年30人近いメンバーとなっています。

3. 共立女子大学の講義と卒業研究

真鍋先生が共立女子大学(家政学部生活美術学科)の非常勤講師を担当している関係で、昭和62(1987)年度より、同大学から毎年1~4名の卒論生を受け入れています。例年、主に部品・構法の変遷等をテーマとして、理大生と一緒に優れた論文を書いています。卒業後、大学院へ(博士課程にも)進学する者も出ています。

4. 構法計画学とは

様々な設計上の手法や構法を、設計に利用するためには、単に個人の経験として修得されるのではなく、蓄積・伝達・教育が可能な客観的な形に整理しておく必要があります。そのためには「原理に基づいた体系的な整理」が必要となります。

構法を体系的に分類・整理する視点としては、1)建築に対する様々な要求を満たすための構法上の手段(手法)を示す「要求側からの視点」と、2)建築各部の構法の、それ自体の構成の原

理から構法の種類を示す「構法側からの視点」があります。それぞれの視点から、「あり得る構法」を、原理に基づいて演繹的に網羅・体系化することが構法計画学の学問体系としての意義であり、この方法論に従って収集・整理された無数の「手法」は、設計のための基本要件のチェックと、新しいデザインのためのアイデアソースとなるものです。

5. 研究テーマ

前述の構法計画学の方法論に基づき、毎年様々な対象について研究を行っており、本年度のテーマも下記のように多岐に渡っています。例年大学院生または助手と卒研生1~3名とで研究班を構成し、共同で研究を進めています。

- ・ 建築各部の性能評価に関する基礎的研究
- ・ 飲食空間の設計手法の体系化に関する研究
- ・ 狭小敷地住宅における対応手法に関する研究
- ・ リサイクル設計手法の体系化のための研究
- ・ 出入口まわりの構法・ディテールに関する研究
- ・ ガラス構法のディテールに関する研究
- ・ 土を用いた構法に関する基礎的研究
- ・ 階段の構法に関する研究
- ・ 天井構法の変遷
- ・ 環境配慮設計手法の変遷
- ・ 水まわり設備機器に関する変遷
- ・ 太陽熱温水器の変遷

6. 研究室対抗サッカー大会の主催

例年梅雨入り前の頃に行っている研究室対抗サッカー大会は、真鍋研究室開設時から何故か真鍋研主催で続いている定例行事です。昨年と今年は、日頃の自主トレの成果と研究室のチームワークの良さが遺憾なく発揮され、主催者である我々がV2を達成しました。

以上、真鍋研究室の活動について述べました。本年の真鍋先生の建築学会賞受賞を契機として、今後さらに研究活動の充実を図っていく所存です。(真鍋研助手=名取 発, 部28期)



2000年度サッカー大会(多摩川玉堤)にて

インフォメーション

第21回築理会研究セミナー

日時：平成12年10月26日(木)
19:00~20:30

講師：森本 仁(部1期)

題名：「未定」

申込期間：平成12年10月1日~10月23日

会場：理窓会館会議室

参加費：1,000円(今年度会費納入済みの築理会員)
2,000円(一般及び今年度築理会会費未納者)
無料(東京理科大学学生、院生)

申込先：東京理科大学 工学部 市川尚紀

TEL：03-3260-4271(内3482)

FAX：03-3260-6316

Email：ichikawa@rs.kagu.sut.ac.jp

現場見学会の予定

築理会ホームページに決まりしだい掲載しますので、ご参加ください。

築理会FAX案内サービス開始

築理会セミナーや、OBと語る会、現場見学会などの情報は会報及び築理会ホームページに掲載しております。しかしながら、ホームページのみに情報が掲載されることになる場合は、インターネットの使用環境にない方にご迷惑をおかけすることになります。そこで、当分の間FAXによる案内を実施いたします。

ご希望の方は、データ確認カードに「FAX案内サービス希望」と記入の上、FAXにて築理会事業委員会市川までお申し込みください。

東京理科大学工学部建築学科 市川尚紀

Tel 03-3260-4271(内3482) Fax 03-3260-6316

「編集後記」

特集に寄稿してもらった上條さんも言う通り、これからは個人のネットワークがより大切になると考えています。インターネットの進展が後押しするでしょう。個人のホームページが仕事につながったという話も聞かれます。ホームページの自慢、ネットワークの活用法など情報をお寄せ下さい。(森 清)

築理会報2000夏号

2000年8月発行 Vol.27

編集長：森清

編集委員：広谷純弘、伊藤学、伊谷峰、
安達功、千田猛、諸岡伸幸、
中川信浩、平賀一浩、大野紋子

印刷発送：グローバルシステム株式会社

平成12年会費納入のお願い

現在、平成12年度の会費の納入をお願いしております。未納の方には振込用紙を同封しておりますので、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のためにご協力をお願いします。

年会費 3,500円

口座名 築理会

郵便振替 00110-5-171952

銀行振込 東京三菱銀行神楽坂支店 普通4335597

募集します！

会報委員会では、築理会報の各コーナーへの記事を募集しています。どんな些細な情報でも首を長くしてお待ちしております。また、建築にこだわらず、おいしい料理の作り方や、うまいラーメン屋情報、あなたの楽しい旅行記、その他の記事・情報、また、はみだしククリにもどんどんお寄せください。築理会あてFAX若しくは電子メールにてお知らせください。

データ確認カード返送のお願い

住所、職場、部署等に変更のございます方は、下記データ確認カードにご記入の上、築理会事務局までご返送下さいますようお願い致します。

最新データに基づいた名簿作成、編集のためご協力をお願い致します。

送付先：建築学科事務室内・築理会事務局

名簿作成委員会

築理会員データ確認カード		記入日：19 / /	
ふりがな：	卒業年	年3月	
名前：(旧姓)	(期)	(研)	
	<input type="checkbox"/> 部	<input type="checkbox"/> 部	
ふりがな/勤務先：			
ふりがな/部署・役職：		TEL	
		FAX	
電子mail：			
現住所：(〒)			
		TEL	
		FAX	
電子mail：			
現住所以外の安定的な連絡先、具体的な連絡方法及びTEL：			
所属学会 <input type="checkbox"/> 日本建築学会 <input type="checkbox"/>)			
<input type="checkbox"/>)		<input type="checkbox"/>)	
通信欄			

お手数ですが拡大コピーをしてFAXにてお送りください。